

シヨール

徳永直

みつ子は、活動写真館の絵看板のまえをいったり、きたりしてはまた暗いところで立どまった。

新銘仙の袷に、縫かえしの銘仙の羽織をきて、コートもなにもない肩のあたりに、毛のすれてしまった赤い肩掛を、ウラさむそうにかけていた。

酒はなみだか ためいきか

かなしい恋の すてどころ

活動写真館のジャズに合して、足拍子をとっているが、みつ子の心は一向うきたたなかつた。……きつと、あの呉服屋のある横丁から出てくる——恋人の姿に気をつけながら、自分の身装に気がかりだった。

コートが、だめなまでにも、せめて、シヨール一つくらいは、明後日はお正月というのに、新しいのを掛けなかった。掛けて、あの人にみせてやりたかつた。

工場の賞与が、今年はないと云い渡されてしまったために——あの横丁の呉服屋の店先に、まだブラ下つてい

る、燕脂に赤いハートの刺繡のある三円八十銭のシヨールが、フイになつちやつたんだ。

羽織は縫いかえし、袷は去年のまま——こんな恰好で、はずかしい——というと、あの人——冗談いうない。欲しいものが買えないのは、みつちゃんのせいじゃなくて、ブルジョアのお蔭なんだ、そんなこと気にしてどうするッ——ていうけれど——。

わすれた筈の かのひとに

のこる心を なんとしよう

レコードが、往來のはげしい大晩夜の夜の街いっばいにながれている。みつ子は、四年もかけているシヨールを気にしながら、絵看板の下をゆき、きする——こん夜のあつまりにくる人達は、身装なんか気にしない人ばかりだけれど——癩だ。のこる心を、なんとしよう、だ。

「……………」

気がつくと、向うの横丁の角から、労働服に、黒い襟先

をグルグルにした男が、みつ子をめつけて一寸片手をあげた。

「あら、あら、あの人も、そうそうオーバー買えなかつたんだわ」

みつ子は、急に可笑しくなって遠慮ない笑い顔で、暗いところに待っていた。

「よう、随分待ったかい」

男は、ウソ寒そうに、そびやかした肩をよせてきた。

「英ちゃんも、オーバー買えなかつたのね、賞与がなくなつたの」

「うん、賞与は目糞ほど貰えたが、××のホラ、あの争議に寄附しちゃつたい」

「まア、気前がいいのね」

男つて、何てまア大きっぱだろ——みつ子は英吉も一緒に並んで歩き出しながら云つた。

「あたしたちの工場、今年ア賞与フイよ」

「賞与が……」

「ええ、だから……」

「そいで……みんな黙ってんのか意ク地のねえ奴ばかりだなア」

「だつてき、妾一人がガン張つたつて、しようがないじやないの」

みつ子はいくらかフクレ気味だ。

「シヨールは、フイになつちまうし」

「だつて、そこに掛けてるじやないか」

「あら、こりやあんた、三年前に買ったんだわよ、こんな子供みたいなもの……」

「ゼイタクいうない。俺だつて古オーバが買えねえんだ」

男は寒いせいか、ドンドン大股に歩く。

「みつちゃん、昨晚やつた文学新聞読んだか」

「うん、半分ばかり」

「じゃよくそれを覚えとくんた。今夜の集まりは美術サークルの集まりだから、思つてることみんないうんだ、いいか」

ノツポの英吉は身体をまげるようにして、

「あたしは、三円八十銭のシヨールが何故買えないでしようか。妾の恋人は何故オーバーも買えないで顛えて

いるんでしよう——つていうのだ」

「可笑しいわ」

「可笑しいもんか、何故賞与をとりあげたか、何故こん

だなア」

「可笑しいわ」

「可笑しいわ」

「可笑しいもんか、何故賞与をとりあげたか、何故こん

な不景気ふけいきになつたか——よつくお互たがいで勉強べんきょうしなくちやいけねえ、プロレタリアは自分の生活じせいのために勇敢ゆうかんに闘たたかうんだ」

「……………」

「わかつたかい」

「うん」

「ううッさむい、おめえ腕うでを出せ。こうやってゆきア、いくらかあつたかい」

「あんたコンパスが長いから、ゆつくり歩いてよ」

「バカ云え、おめえが早く歩あるくんのだ」

よし——とみつ子は思おもつた。何故なぜ妾わたしはシヨールが買かえないでしようか！ 妾わたしの父ちちは何故なぜ三年ねんも失業しつしてるでしようか！ 洗あらいざらい云いつてやろうと思おもうと、急きゆうに元氣げんきがでて来た。男おとこの長いコンパスに負まけまいと駆かけ出すように歩あるいた。

二〇二六年二月二日 初稿 公開

【解題】

〈初出〉『美術新聞』第二号（一九三二年二月二五旦）

※ 摺筆は「一九三二、一二」。

〈翻訳〉 Translated by Samuel Perry 'Shawi', Edited by Heather Bowen-Struyk and Norma Field

"For DIGNITY, JUSTICE, and REVOLUTION : An Anthology of Japanese PROLETARIAN Literature", The University of Chicago Press, 2016.

※ 本稿では初出を底本とし、底本に振られているルビ以外に、明らかなルビの振り忘れや難読と思われる漢字に新しくルビを追加した。また、適宜句読点を補足した。

入力・校訂者 Ⅱ 和田崇